

# 茶の各種樹体情報に基づいた被覆可否の判断基準を設定しました

被覆栽培に取り組む県内茶産地においては、施肥量の不足や長期被覆や過度な摘採期の延長から、樹勢衰弱と思われる落葉等の生理障害が発生し、生葉収量や全窒素含有率が低下する問題が生じています。

そこで、各種樹体情報から樹勢を客観的に診断し、次茶期以降の被覆可否を事前に判断する手法を検討しました。

## 二番茶後整枝時における成葉の全窒素含有率の推移

試験区	全窒素含有率 (%)		
	H27(1年目)	H28(2年目)	H29(3年目)
無被覆(N-49.8)	3.6	3.6	3.4
14日被覆(N-49.8)	3.6	3.8	3.6
21日被覆(N-49.8)	3.6	3.7	3.6
無被覆(N-0)	3.2	3.1	3.0
14日被覆(N-0)	3.3	3.2	3.0
21日被覆(N-0)	3.2	3.2	3.0

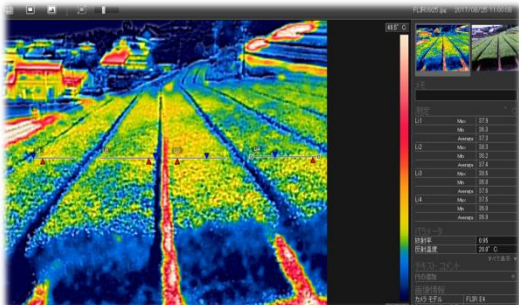
注1) 試験区内の( )は年間窒素施用量を示す。

注2) 成葉は新芽直下の硬化葉を採取した。

無施肥区(N-0)では年々全窒素含有率が低下



一番茶の新芽と被覆資材



熱画像装置による茶園の撮影と温度測定



一番茶上位2葉目の葉色調査

チェック項目	1年目二番茶終了後～				2年目～						
	6月	7月	8月	9月～3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
	二番茶		秋冬番茶		一番茶		二番茶		秋冬番茶		
成葉の全窒素含有率	成葉の全窒素調査				樹冠面温度調査		葉色の調査		成葉の全窒素調査		樹冠面温度調査
成葉の全窒素含有率	※3.3%以下の場合には翌年被覆しない										
樹冠面温度					※無被覆と比べ1℃以上高い場合は翌年被覆しない						
葉色					※被覆茶園でSPAD値37未満の場合には以降被覆しない						

## 被覆可否の判断時期と各基準

### (研究成果)

・施肥量の不足や、長期被覆、過度な摘採期の延長により、一番茶の葉色は薄くなり、盛夏期（三番茶萌芽期）の樹冠面温度は高くなることがわかりました。

また、二番茶摘採後から整枝期における成葉の全窒素含有率も低くなることわかりました。

・「被覆することで経営的なメリットが得られる基準」を設定し、被覆の可否が判断できる基準を設定しました。